

आयुस् あーゆす

(発行) 京都文教大学図書館
京都文教短期大学図書館／京都府宇治市槇島町千足80

図書館への誘い

京都文教短期大学図書館長

幼児教育学科・教授（声楽、音楽教育） 伏見 強

私は学生時代、大学の図書館や近くの音楽資料室をよく利用しました。静寂が保たれていて本の匂いと快い張り詰めた空気感が大好きでした。当時はアナログの時代でしたから著者名やタイトルなどが記されたカード目録を頼りに図書館司書さんのお世話になりながら目的の図書を探したものです。私は声楽科の学生だったので時間ができると、図書館や音楽資料室に日参し、当時世界を風靡していたドイツリート（歌曲）の巨匠フッシャー・ディースカウなどのレコードを借りては試聴室で聴いたものです。また、授業で使う楽譜はほとんどが洋書で一般の書店では取り扱われておらず、銀座などの専門店に行かなければなりませんでした。当時の為替レートは1ドル／360円だったこともあり、洋楽譜は学生にはとても高価で、取り寄せるにも数ヶ月を要するものもあって苦労したものです。大学の図書館や東京文化会館の音楽資料室にはあらゆる専門的な資料が揃っていて大いに助かったことが昨日のこのように思い出されます。

京都文教大学・短期大学の図書館は、学生や教員の教育研究を支援するため、本学の教育研究に

関する書籍などを中心に体系的に収集・集積しています。蔵書検索（OPAC）はWEB上に公開しており、自宅パソコンやスマートフォンを使つての検索も可能です。また、図書館のWEBサービスにより、貸出・予約状況の確認、貸出延長、WEB-I L L（文献複写・現物貸借申込）、図書リクエスト等をWEB上で行うことができ、随分便利になっています。

昨今、大学の授業でもアクティブ・ラーニングが叫ばれ、いっそう自発的な予習復習が求められるようになってきていますが、本学図書館ではこれらのニーズに対応するため、学生の調べ学習に関するレファレンスや選書ツアーでの選書指導なども実施してきました。また、学生の学習向上に向けて、図書館が所蔵する教育資源の有効活用の具体的な方法を提案しており、授業での図書館資料の紹介、シラバスに掲載されている参考書や授業で使用されるDVDコーナーなども設置するなど、使い易い学習環境の整備に努めています。昨年11月に実施された選書ツアーには私も参加し、多くの書物に囲まれて楽しいひとときを過ごすことができました。

インターネットが全世界に普及し、あらゆるもののデジタル化が進む今日、私の学生時代を顧みると正に浦島太郎のような心境にもなりますが、その一方でネット社会の利便性とは裏腹の危うさも感じられてなりません。学生が洪水のような情報の中から正確な専門的知識を探し当てるのは容易ではないでしょうし、学習成果の獲得は一見無

駄に見える体験の積み重ねによってはじめて自分のものにできるという側面もたくさんあります。図書館にある正確な情報などを直接手にしながら、思考を重ねてトレーニングに励むことが求められます。有意義な学生生活を願って、多くの学生の来館を歓迎します。

(ふしみ つよし)

★★★☆☆ 最終講義を終えて ★★★☆☆ — 本大学設立の意義について —

非常勤講師(元臨床心理学部・教授(臨床心理学)) 森谷寛之

本学は1996年に文化人類学科と臨床心理学部の人間学部として創立された。私はその創立時のメンバーとして、1998年に着任した。それからちょうど20年、この3月に定年退職となる。退職の通過儀礼として2月21日に「最終講義」を行った。平岡学長はじめ、川畑副学長、濱野学部長、禹学科長をはじめ、多くの教職員、学部生、大学院生、また修了生が駆けつけて下さった。松田真理子教授はその準備と司会を務めていただいた。この場を借りて皆さんに感謝申し上げる。何とか無事に終えて、ホッとしている。

講義のテーマは「臨床心理学の過去・現在・未来—テキスト『臨床心理学』サイエンス社第2版をめぐって」である。

副題にあるように筆者が「臨床心理学概論」の講義に使ってきたテキストの成立の由来とその改訂に伴ういきさつから始めた。その内容は、近代科学の出発となるガリレオの月観測から始まり、心理学の誕生、そして公認心理師国家資格化までの約400年にわたる歴史が中心である。最初、私が何を言いたいのか、分からないと感じた人も多

かったのではないだろうか。

それは「臨床心理学」がいったいどういう学問か、なぜ、本学は、わざわざ日本で最初ともいべき臨床心理学部を作り、また、2008年に日本最初で、今なお唯一の「臨床心理学部」を作ったのか、その理由の説明である。それは「心理学部」とどう違うのか。この説明が実はなかなか大変なのである。

心理学の誕生は、それ以前に物理学(16-17世紀)、化学(18世紀後半)、解剖学(16世紀)、生物学(19世紀)などの後になる。そして心理学には異質な2つの誕生がある。最初は「精神物理学」として19世紀後半に誕生し、次いで20世紀初めに「精神分析」として誕生する。前者が実験心理学、後者が臨床心理学となる。この誕生のいきさつが世間に理解されていない。

世間の人々が心理学に抱く印象と大学人の考える心理学とは天と地ほどのギャップがあった。世間では心理学と言えば、「性格や悩み」の研究であると思っ込んでいる。しかし、いざ大学に入ると、まったく違ったと驚く。世間の思い描く心理学と

言えば、今の臨床心理学に相当するが、大学人はアカデミックな科学研究、すなわち、実験心理学を指していた。世間の想像する心理学は、大学にはなかったと言える。そのような現状を打開するためにできたのが、本学の臨床心理学科、臨床心理学部である。

なぜ、このような奇妙なことが生じていたのか。学問分野が割れることは歴史上しばしば生じていた。たとえば、医学の内科と外科である。医学とは今日の内科のことで、ルネサンス以降、解剖学が始まることで外科が台頭した。物理学はニュートン力学のことで、20世紀に量子論が生まれたことで、2つは大きな論争となった。筆者の学生の頃は、経済学が2つに分かれていた。すなわち、近代経済学とマルクス経済学であった。これらは学者が仲が悪いのではなく、それぞれその

背景が複雑であるからである。ミクロの自然界ではニュートンでは説明がつかないと分かった。経済では社会に階級があるが故に、その現れとして対立が生じた。心理学では、人間精神の複雑性が2つの違った立場を生み出したと言える。これらの複雑さが理解されるようになると、対立はいつの間にか解消していく。今は、内科と外科、古典物理学と量子論、2つの経済学などの対立も聞こえなくなっている。2つの心理学も今後はその違いを克服し、共に発展するのではないだろうか。

公認心理師資格が他のどの職種よりも遅れ、2015年ようやく成立したのは、人間精神の複雑さ故である。そのような重要な学問分野を抱え、担って行く覚悟の末にできた本学は、大変貴重な存在であると考えている。本学の今後の発展を期待している。

(もりたに ひろゆき)

⚙️⚙️⚙️⚙️⚙️ 人と人が支えあうことの意味 ⚙️⚙️⚙️⚙️⚙️

幼児教育学科・准教授(障害児教育学) 張 貞 京

20年以上通い続けている知的障害者の施設がある。障害を学び、障害のある人たちの思いと願いを知りたいと考えてきた私の研究の原点がそこにある。入所している人たちの知的障害の程度は個人差があり、言葉を話さない人から、どんな相手でも自分のペースに巻き込んでコミュニケーションを取る人まで様々な人が生活している。幼少期から入所している人もいるが、多くの人が成人してから集団で生活し、同じ敷地内にある作業場へ出かけて仕事をする毎日を過ごしている。体の麻痺があって、片手しか使えない人や自力で歩くことが出来ない人もいれば、数を数えられない人や言葉を理解することが難しい人もいる。一人

ひとりは出来ないことが多く、制度の側面からみれば支援が必要な人たちであることになる。

しかし、仕事は農耕作業から織物まで多様な仕事が目につけられており、彼らは自分自身の担当している仕事に誇りを持っている。毎日の仕事はただ単に決められた工程をこなしていくのではなく、一つ一つの工程が協力関係であるように作られ、協力することで完成品ができあがるように考えられている。出来ないことは他者と協力して取り組む。職員の助けは必要だが、職員との関係ではなく、一緒に生活し仕事をする関係の中で、障害のある人たち同士が支え合いながら生活し、仕事に取り組んでいる。

この施設は、戦後の養護が必要な子どもたちや障害のある子どもたちの生活と教育に力を注ぎ、福祉の父と呼ばれた糸賀一雄先生が創設した近江学園の流れを汲む施設の1つである。大学院への入学が決まった後、指導教官である田中昌人先生に連れられて尋ねたのが始まりだった。

この施設に通いはじめて1日目に、私の名前を覚えてくれる人がいた。お客さんの名前と顔はもちろんだが、職員や友達の家族の名前まですぐに覚える人だった。重度の自閉症がある女性で、コーヒーと紅茶が大好きで、24時間お茶のことを考えているようだった。職員の部屋に忍び込んで置いてあったコーヒーを飲んでしまったり、用意してあった人数分のコーヒーを飲みほしてしまい、飲みすぎて噴水のようにコーヒーを吐き出したこともある。なんと私のすぐそばで。そんな時でも、一緒に仕事をしていた友達は、すぐに雑巾を出して後始末をしていた。一連の動きを見ながらも、自分の汚れを気にするよりも居心地の良さを感じていたのを記憶している。

彼女は布で素敵な模様のマットを作り上げる結び織りを仕事としていた。いつでもお茶のことを考えているため、仕事に集中できる時間はとても短く、お茶が飲みたいと騒ぎ出すことが多かった。そんな彼女を周りにいた障害のある友達は、怒

らず責めずに受け止めていた。彼女を責めるのは職員だけだった。完成させる作品数が少なくても、みんなのお茶を飲みほしても、仲間として協力し合って生きる存在として受け止めていたのであった。数年前にあった還暦祝いの場で、同じ仕事をしていた別の女性が自分の仕事について、「私の結び織りは日本一です」と話したことがある。その女性は、若いある人に対しても、「あなたも立派になりましたね」と祝いの言葉を述べている。

出来ないことがあっても、やってはいけないことをしても、静かに受け止めて出来る時のために支えていく。なぜ、そのようなことが出来るのか。それはゆっくりでありながらも、障害が有っても、成長発達変化していく存在として受け止めていたためではないだろうか。相手の発達の可能性を信じ、自分自身の発達を喜ぶことができる。そして、互いが支え合っていくことが当然である生活と仕事の間があるからこそ育まれる姿である。

20年以上も通い続けている今でも、居心地の良さを感じる施設である。人と人が支え合っていくことは、出来る出来ないとか優劣の問題でなく、存在そのものを認め合っていく社会であることが望ましいことを教えてくれる場所である。一人の人間として、あるべき姿について考えさせられる。

(ちゃん ちゃんきょん)

❖❖❖ 『地域文化観光論 新たな観光学への展望』における 「往還的思考」について ❖❖❖ (橋本和也著／ナカニシヤ出版・2018)

非常勤講師(元総合社会学部・教授(文化人類学、観光学)) 橋本和也

2月17日に「『地域文化観光論』への思い」を最終講義で話しましたが、ほとんど触れることが

できなかった「往還的思考」について述べさせていたきたいと思います。さまざまな領域の学問

的研究が学際的にむすびつきながら形づくられる過程にある「観光学」という学問領域においては、どのような全体像を展望できるかが模索されています。観光社会学、観光地理学、そして観光人類学、その他にも観光マネジメント、観光政策などの専門各領域における研究（「部分」）と観光現象「全体」を見通す研究とをいかに「むすびつける」かについての展望を考えることが求められています。

そのときにヒントとなるのが「往還的思考」だと実感しています。ライプニッツは精神と物質との往還、「一なるもの」と「多なるもの」との往還を探り、それを受けてミシェル・セールは「一なるもののうちでの多の表出」、すなわち物質がいかにして真に多様なものであるかを考察するときに、ダイナミックな「往還」関係の洞察が必要であるといい、「あるがままの多」をいま・ここにはじまるものとして捉えることを主張します。人類学分野では、クリフォード・ギアーツが『ローカル（固有の）ノレッジ』（1991）で、インドネシアの事例を扱ったなかで、固有の知識の「小さな想像性」とコスモポリタンの「大きな想像性」との間の「往還」について、具体的には「英米の法伝統」と「イスラム的、インド的、マラヨ＝インドネシア的法伝統」を対比しながら、弁証法的な「往還」運動の必要性について述べています。それは知識のあり方、思考のあり方についての示唆となります。ひとつの地域の（「部分的な」）知識を比較によって他の地域の知識と「むすびつけ」、より大きな（「全体」的な）知識に「推察（アブダクション）」を通して「むすびつける」方法です。

「全体」にたどり着くために、本書で提案するのは、「部分」に徹底的にこだわる方法です。ギ

アーツはひとつの「固有の文化」の中に飛び込んでいくことを提唱しています。「そうすることで世界が手元から逃げていくことはない。むしろ反対に、そうすることで一つの世界が見えてくるのである。いや、一つではない、さまざまな世界が視野に入ってくる」と述べています。また、儀礼の過程の一部を忘れたパプア・ニューギニアの長老の事例も参考になります。その長老は「空白」を埋めるという不可能なことをしているのではなく、マリリン・ストラザーンは「現在あるもので、自らのために情報を作り出そうとしている」のだと、『部分的つながり』（2015）のなかで指摘しています。長老は他のコミュニティから借りてきた知識を使うことも選択肢にいて、「単に自分たちが知っているものを再創造している」のだと説明しています。「切断」という行為は全体を想像する創造的行為で、「切断」を、諸関係を現れさせ反応を引き出そうという意図でおこなうところでは、「切断」はそれぞれの内的な能力と関係の外的な力を顕わにし、全体性を立ち現せませす。ここでも、部分と全体の「往還的思考」の可能性が示されています。

本書では、このような「部分」と「全体」との「往還」的關係をアナログカルに、部分としての「地域文化観光論」と全体としての「観光学」との関係でとらえることを提案しました。多くの領域や地域との比較研究をおこない、議論においては視野を可能な限りひろげ、単に日本の「地域文化観光」の事例にとどまらず、観光現象全体、「観光学」研究全体を展望する意図、すなわち、部分としての「地域文化観光」研究を、つねに観光現象全体を「推察」する意図をもっておこなうことが必要だと思っています。

（はしもと かずや）

¥ ¥ ¥ 私のすすめる3冊 (私の推薦図書) ¥ ¥ ¥

ライフデザイン学科・講師(調理学、応用栄養学(高齢者栄養)) 岩田 美智子

◎ 『ふわとろ : Sizzle word : 「おいしい」言葉の使い方』

B・M・FTことばラボ 編 / B・M・FT出版部. 2016

本の題名『ふわとろ』は、「ふわふわ」と「とろとろ」の2つのオノマトペが合体した、日本人が好む食感を絶妙に表現したシズルワード(おいしさを表現する言葉)です。この本には、おいしい食材や料理を作り出している人、おいしい本や映画、シズルワードがぎゅっと詰まっています。全てのページが“おいしい”でできています。開いたページをつまみ食いするようにして読むことをお勧めします。

◎ 『青葉繁れる』

井上ひさし 著 / 文春文庫. 1974

我が家の本棚でひときわセピア色した古参の文庫本です。作者は、昭和のミュージカル人形劇「ひょっこりひょうたん島」の作者である井上ひさし。この『青葉繁れる』はテレビドラマや映画にもなったので、見たことがあるという方もいると思います。東北仙台の男子進学校に通う落ちこぼれ集団が東北弁全開で繰り広げる、読むたびに可笑しくやがて切ない青春小説です。

◎ 『Disease : 人類を襲った30の病魔』

MaryDobson 著 小林力 訳 / 医学書院. 2010

ビタミンCの欠乏症として知られる「壊血病」や予防接種によって根絶されたとされる「天然痘」、アフリカで起きた「エボラ出血熱」など、はるか昔や遠い外国のことと思っている人も多いと思います。しかし、ほとんどの病気がつい最近まで原因がわからずに、多くの人が悲しみの中に死んでいった病気であり、今だに海外で多くの人が苦しんでいる病気であることが、この本の中の当時の挿絵や風刺画あるいは写真によりリアルに伝わります。健康で暮らせることのありがたさと危うさを教えてくれる1冊です。

(いわた みちこ)